

第4回

大阪四大学交歓演奏会

6月18日(火) '68

府立厚生年金会館ホール

6.00 p. m. 開演

ごあいさつ

会場の皆様、本日はお忙しいなかをようこそおいで下さいました。

私達四大学交歓演奏会も今年でようやく第4回目を迎えることになりました。これもひとえに皆様の暖い御支援の賜と一同深く感謝しております。

私達四大学交歓演奏会は今から約6年前、地理的にも環境的にも似かよった在阪国公立の四大学が交歓と理解を深めようと演奏会を開いたわけです。しかしいかに学校の性質が似ているとはいえ4つの大学の二百数十名という大人数が行動を共にするわけですから、そこに色々な問題が生じてきました。例えば、演奏会だけでは単に事務的な交流に終わってしまい、部員同志の真の交歓がなされないということです。それらのため演奏会は2回で中断してしまい、約2年間の空白期間がありました。しかし、私達はその間に過去の失敗を反省し、再度四大学の在り方というものを検討してまいりました。そして「四大学の相互理解を深め、各大学、ひいては大阪の合唱レベルの向上に寄与する」という目的を設定し過去3年間にわたりこれを実行し相互理解を深めてまいりました。しかし発足して間もない上、現代の複雑な人間関係の中で我々の前には沢山の障害、問題が立ちふさがっているでしょう。しかし私達はこれらの一つ一つを乗り越え、その後に得られる感激歓びに向って努力を惜しまないつもりです。本日の演奏会は私達四大学の目的にそって「お互いに演奏を聴き合い批評し合い、更に一般の方々の批判の声を迎おう」という主旨で開催されました。それ故今年も昨年同様観客席に私達の席を設けました。皆様に多少迷惑をかけるかもしれませんが、私達グリーンメンの趣旨と心意気を十分御くみ取下さいまして御了承下さいますようお願い致します。

最後にまだまだ勉強の足りない私達ですが、ごゆっくり御鑑賞下さい。そして皆様の卒直な御意見、御批判を賜りますようお願い致します。

大阪大学男声合唱団
大阪府大グリーンクラブ
大阪市大グリーンクラブ
大阪外大グリーンクラブ
— 同

プログラム

I ロシア民謡集

……… 大阪大学男声合唱団

カ リ シ カ

指揮 高 木 善 之

せわしき流れの川

ヴォルガの舟唄

ステンカ・ラージン

母なるボルガを下りて

II 組曲「青い照明」

……… 大阪府立大学グリークラブ

普 香 天 子

作 詩 宮 沢 賢 治

未来圏からの影

作 曲 清 水 脩

森

指揮 木 村 龍 介

開 壑

高 原

—— Intermission ——

四大学合唱団を激励する

長 井 齊

わが国の合唱は、実行力の最も旺盛な大学の男声合唱団によって先導され、今日の水準に到達していることは、その歴史を遡るまでもなく明白な事実でと思うのです。ですから全国には四連或は六連と通称される大学男声合唱団の連合体が組織されて、全国合唱界の推進源になっていることは、既に衆知のところですが、本日此処に登場する四大学も更にその連結を強固にして、その意気に燃えた演奏を公表することは、前に述べた意味をこめて誠に当を得た企てと協賛の意を表するものです。

尚、この大阪四大学演奏会には、郷土大学合唱の実力向上に寄与する意図を充分に自覚してそれぞれ熱演を展開されるよう念願して、多大の声援と激励の言葉を贈る次第です。

Ⅲ 四 月 の 顔

..... 大阪市立大学グリークラブ

木 製 の 人 魚
つめたい春の憂うつ
湖上をわたる狐
四 月 の 顔
香 爐 の 秋

作 詩 大 手 拓 次
作 曲 林 宏 太 郎
指 揮 桂 晃

Ⅳ 黒 人 霊 歌 集

..... 大阪外国語大学グリークラブ

My Soul's Been Anchored in De Lord

指 揮 安 藤 雅 之
バリトンソロ 梶 江 靖 史

There is a Balm in Gilead

テナーソロ 板 村 哲 也
バスソロ 大 井 耐 三

Were You There

バスソロ 野 間 清 治

I Got Shoes

Let Us Brcak Bread Together

The Battle of Jericho

Soon Ah Will Be Done

V 合 同 演 奏

Media Vita

指 揮 桜 井 吉 明

「曲 目 紹 介」

広大な原野、大地から湧いて来る様な力強く、しかしどこか哀愁の漂う歌声、ロシア民謡は長く苦しかった民衆の生活の歌である。吟遊詩人によって人々の間に広まり大発展したこの民謡は、多くバラード形式をとり、英雄を物語り、生活の喜怒哀楽を語っておのずと聞く者を引きつける。その内容も抒情的なもの、叙事的なもの、諷刺など全般にわたり、特に英雄伝、恋の歌、生活の歌、革命の歌が大部分を占める。その美しい素朴な民俗的メロディー、豊かな表現力、情緒の強靱さ、哀愁が好まれ世界中で歌われ、特に合唱されている。しかしその哀愁も強い生命力、不屈の闘争心に貫ぬかれている。

1. **カリンカ** カリンカとは赤い実のなる灌木を意味し、婚礼の花嫁を祝う踊り歌です。多勢集まれば歌い出し、陽気なロシアダンスも出てくる、という楽しい曲です。
2. **せわしき流れの川** 大河の上流鋭く切り立った両岸にはさまれて、地の底を流れるかと思われる河水は、ゆったりしている様で実は渦巻いて流れる激流であり、それを眺めつつ故郷への感慨を歌ったものである。
3. **ヴォルガの舟唄** 重い足取りに乗って地の底から呻く様にきこえてくる歌声、それは苛酷な搾取と労働に苦しむ舟曳人夫達の血と汗と涙の歌です。ロシア人の心の河とも言うべきヴォルガ、この河を歌った数多くの中でも、特に男性的で迫力あるものです。
4. **ステンカ・ラージン** 17世紀、モスクワ王国の専制に苦しむコサック農民を率いて反抗した英雄ステパン・ラージンを歌ったもの。遂には処刑されその伝記も歴史から抹消する様命ぜられたが、民衆は歌によって後世に語り伝えたのです。
5. **母なるボルガを下りて** 「我らの野原よ」という意味の題で、国内戦に参加した若者達の歌、自分達の祖国を守るために故郷を離れ侵略軍との戦いに出発する若者、それを見送る娘達の様子が簡単なメロディーと軽妙なリズムで描かれています。

「男声プロフィール」

私達阪大男声合唱団は昭和27年12月27日に結成されてから、今年で17年目を迎えます。昨年12月には第15回記念演奏会をもつことができ、合唱界においてもその存在をほんの少しばかり認められ、団員一同今年も躍進の年でありたいと日夜練習に励んでおります。

この17年間の我団の特徴はなんといってもドイツ合唱曲を重要なレパートリーとしてきたことでしょう。飽くことのない普遍的な音楽性をもったドイツもの、中心の傾向が強く関西合唱界においても、異色の存在として注目されてきました。しかし最近では邦人組曲・黒人霊歌・ロシア民謡なども手がけ、ドイツものに限らず、バラエティーに富んだ選曲をと心掛けるようになってきました。この間団員数も大幅に増加し、選曲傾向も随分と変化してきましたが、あの伝統のメンタルハーモニーは依然として阪大男声の中に堅固として根をおろしています。男声合唱団特有の、女性をして強くエクスタシーに誘い入れずにはおかない、あのズシリと重厚なハモリは、団員相互のより強固なメンタルハーモニーからかもし出されるのではありますまいか。阪大に学ぶ男声MENが種々の時間的・経済的・地理的な現状の制約を受けながらも、団結と連帯、そして友情の絆を結び、歌うことに人間的な喜びを見出してきたのは団員同志のメンタルハーモニーが基盤になっているように思えます。合唱とは人間相互の調和から生れる。したがってそこにはメンタルハーモニーからミュージカルハーモニーへの移行の必然性があるものと確信します。今年の団員名簿の自己紹介欄に「地球がメンタルハーモニーで包まれたらどんなに素晴らしいことだろう」という某団員の切望がありました。現実の矛盾の中であって、私達団員は物質的基盤を媒介とするこの世のメンタルハーモニーを願いながら歌い続ける覚悟です。

このような伝統を守り発展させていこうとする私達団員各人の使命感が、今夜の演奏会に少しでも現われ、これを契機として、現実を目をそらすことなく、常に未来を志向する新らしい阪大男声へと発展進歩して行きたいと思ひます。

曲 目 解 説

宮沢賢治は大正7年盛岡高等農林学校を卒業、後大正10年に花巻農学校の教諭となった。後に「春と修羅」と題して出版した詩集はこの頃書き始めた。しかし6年間の教師生活の後、彼は退職し開墾を始めたのである。

教師生活初期に書かれたものは「春と修羅第一集」であり「心象スケッチ」と傍題されているが、その基調は自然と心象の一体化であるとともに彼の心象の寂寥である。以後開墾生活に入るまでの作品が「春と修羅第二集」である。安定した教師生活の中で書けたもので、初めはその愉快さがあふれていて平易な牧歌的な叙景詩が多い。しかし徐々に現状にあき足らなくなり今の生活から抜け出そうと苦しんだのである。「未来園からの影」はこの時の気持を表わしている。そこで遂に退職し開墾生活に入り、農民になり共に生きようとした。これから「春と修羅第三集」の作品を書き始めたが、間もなく病で倒れ「雨ニモ負ケズ」にみられるような一種の敗北感を抱きつつ、この世を去った。

なお「青い照明」という題は「春と修羅第一集」の序の中から採られたものである。

わたくしという現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの音い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

未来園からの影

吹雪はひどいし

けふもすさまじい落盤

……………どうしてそんなにひっきりなしに

凍った汽笛を鳴らすのか……………

影や恐ろしいけむりのなかから

蒼ざめてひとがよろよろあらはれる

それは氷の未来園からなげられた

戦慄すべきおれの影だ

(第二集より)

高 原

海だべがど おら おもたれば

やっぱり光る山だたちゃい

ハウ

髪毛風吹けば

鹿踊りだちゃい

(第一集より)

ク ラ ブ 紹 介

大阪府立大学グリークラブ

我が府大グリーは昭和24年浪速大学発足と同時に浪大コーラス部として発足以来、早くもクラブ創立19年を迎え、東京都立大学との交歓演奏会12回、定期演奏会12回を数えるまでになり、活動範囲も近年非常に幅広いものとなってきました。さらに昨年より再開されましたこの四大学が年間行事の大きな柱の一つになりましたことを部員一同、心より喜んでおります。今年も3月の小豆島合宿、4月の新入生歓迎会、6月の合唱祭、そして本日のこの四大学、7月の東京都立大学との交歓演奏会、夏合宿、大学祭、京都府立大学賛助出演、定期演奏会など対外的、対内的にも盛沢山な予定をかかえ、積極的な活動を開始致しました。例年のことながら部員不足に悩み、あの手、この手のすさまじい新入部員勧誘の末、現在50余名、その大部分が合唱未経験者で、実験実習の多い工、農学部の学生が多いこと等クラブ活動は大変行ないにくい実状ですが、より高い音楽性、より深いメンタルハーモニーと、クラブのモットーであるあらゆるハーモニーの追求に一同熱意を燃やし続けています。

しかしまだまだ未熟な私達ですが、今後とも皆様方の暖かい御指導、御鞭達の程よろしくお願い申し上げます。

曲 目 解 説

大手拓次は1887年群馬県に生まれ、大正、昭和を生きた不遇な詩人でした。ボードレールやサマンに影響を受けた彼の詩風は、フランス象徴詩の官能と香気をよく伝えています。彼はまた北原白秋の近代風な面に共感をもち、白秋を師として仰いだのですが、日本詩の伝統や時代の詩的環境を否定するところから出発して、まことにユニークな詩の世界を作り出したのです。彼に友愛の情を示した萩原朔太郎は、大手拓次の本領を、性の悩ましいエロティズムと或る妖しげな夢をもったプラトニックな恋愛詩に尽きると評しています。彼の作品は当時、一部の人々に注目されたのみで認められることなく、47才で独身の生涯を終えました。彼の真価は死後に刊行された詩集「藍色の墓」などではじめて認められたのです。

この合唱組曲「四月の顔」は詩集「藍色の墓」の中から作曲者林宏太郎氏が自分の持つ音のイメージに合もて詩を選び出し、合唱組曲に構成されたものです。

大手拓次は孤独で内気な人でした。その性格が彼を憂うつにし、閉鎖的な性格をますます助長させ、自己の密室の中で陰湿で奇妙な粘着性をもつ情操を発酵させていたのです。彼は自己の密室の中で幻想を焚き、幻想のゆらめきを詩の言葉にしたのです。彼独特の、みごとな語彙で彩られた妖気と色香との陰影に満ちた詩、換言すれば彼の幻想と五官の織りなす豊満な言葉のアラベスクはこのようにして生まれたものです。しかし彼の詩は決して現実と無縁のものではありません。現実の中にひそかに育つ、人間の願望、情感、それらを抽象して詩の中に形象化したのだということが出来ます。人間は本来孤独な存在です。我々はこの孤独な人間の心の中の抒情的な味わいを表現しようと思うのです。

大阪市立大学グリークラブプロフィール

市大グリークラブは、旧大阪高商、旧大阪商科大学グリークラブに以来、43年の伝統を持っています。私達の目標は、音楽性の向上と、合唱を通じて人格形成をはかることにありますが、要するに私達は音楽を知ろうとし合唱を楽しもうとしているのです。学業のかたわら、限られた時間を利用しての活動ですので練習量も十分ではなく、技術的な未熟さは否定できません。しかし暗く殺風景な練習場で週二回、私達グリーンメンの一致団結した若きエネルギーが、その破れたガラス窓を揺り動かす時、私達は青春の充実感をあらためて感じるのです。部員相互のメンタルハーモニーに支えられた、力強い、フレッシュなハーモニーを作り出そうとしているグリーンメンの顔は生き生きとして、幸福感に満ちあふれています。しかし私達のクラブでも青春の苦悩に満ちた人間の集合体である以上、数多くの問題を抱えています。そこで私達は、決してあせることなく、時間の許す限り徹底的に話し合うように努め、少しでもよい解決方法を見つけ出そうとしているのです。

私達は今後も、商大時代からの輝かしい伝統を受けつぎ、発展させ、またユニークな現代的センスを身につけて、一層の発展を目指して努力していくつもりです。

黒人霊歌

1963年8月28日、アメリカ合衆国の首都ワシントン、リンカーン記念堂前の広場では、20万人に達する黒人と白人が全国各地から集り、アメリカ史上最大のデモストレーションをくりひろげた。奴隷解放宣言100周年を記念するワシントン大行進も、夏の夕陽が沈む頃、壇上に故マーチン・ルター・キング牧師があらわれ、いささか興奮した調子で演説を始めた時、最高潮に達した。

「100年がかくして過ぎ去り、我々は今この国の首都にやって来た……私には夢がある。いつの日かジョージアの赤土の丘の上で、かつての奴隷の子供達と、かつての奴隷主の子供達とが一緒に腰をおろし、兄弟として同じテーブルにつく時が来るであろう……」聴衆に終始なりやまぬ拍手と共感を呼びおこしたキング師の演説は、最後を有名な黒人霊歌の一節で閉じたのである。

「自由に、自由に我ら自由にならん」やがて “We shall overcome” の大合唱が力強く歌われた。

× × × ×

夢を果さずして、凶弾に倒れたキング牧師は死の直前、黒人霊歌の “Take My Hand, Precious Lord” を所望したと伝えられている。彼は歌の意味のまま、主に手をとられ昇天した。黒人にはいつも歌があった。17世紀以来暗い日々を送ってきた彼等であったが、歌がいつも慰さめと希望の光を与えた。楽しみにつけ、苦しみにつけ歌い続けた彼等は素晴らしいミュージシャンだった。

今でこそアメリカ黒人は “Freedom!” と叫べるのだが、その昔、ものをしゃべる家畜として生きねばならなかった時代には、“Amen” と祈ることにより奪われた人間性を回復した。農園での一日の可酷な労働を終えた黒人達にふと口ずさまれる歌、疲れきった身をも心をもいやす歌、清純な祈りをたたえた黒人の魂の歌、それが黒人霊歌なのです。黒人が現実の奴隷生活の痛苦を、キリスト教の神に訴え、求められないものを憧憬する現実逃避の響きは、霊歌のもつ独特のリズムと特異な旋律によって極めて鮮明に唱われています。迷信信仰の強い黒人がキリスト教信仰に見出したものは、来世の幸福、英雄の出現、原罪観念などで、信仰することによって救われると信じた彼等には、歌うことは生命の力であり、未知なるものへの畏敬の念であり、生活そのものであったのです。どこの誰が作ったかわからない黒人霊歌に、燃えつきる生命のともしびやきらめく涙の美しさを発見するのに、黒人の魂がいつまでも輝いているからでしょう。



プロフィール

大阪外国語大学グリークラブ

我々大阪外国語大学グリークラブの誕生は、昭和初年にさかのぼり、当時かなりの活躍を示していたようですが、その間戦争等幾多の困難の末、遂に解散の憂目をみるに至りました。現在のクラブは昭和28年に再建された2代目です。再建当時は学舎が高槻と上八の2つに分かれていた結果、練習も思うにまかせなかったと聞いています。しかしその後校舎も現在の上八に合併される等の好機も手伝って徐々に大きくなり、定期演奏会も大阪ガスビルホールから産経会館に進出、今年で早くも12回目の定期演奏会を迎えることになりました。この間欠かさず歌ってきたのが本日皆様方にお聴かせするこの黒人霊歌です。この伝統ある黒人霊歌をさらに深く理解するため、その背景から捕えてゆこうと毎日研究しております。

活動の方もまた活発で、今年になってからも3月の北陸・名古屋方面への演奏旅行、春期合宿、新入生歓迎合宿、合ハイ、合唱祭参加、そしてこの四大学交歓演奏会、さらに7月には岡山大学グリークラブの賛助出演が決定しています。

今夜は新入生にとって2回目のステージ。さあ幕が上がるぞ。頑張ろうぜ。

Gaigo will shine tonight!

四大学のあゆみ

昭和37年の1月、以前から大阪の大学グリークラブ間の交歓を深めようとの声があったのではありませんが、国公立で、性格的にも類似し、同じ悩みを持つもの同志がよかろうとの事で、今夜と同じメンバーで演奏会を持つ事が決定されました。

第1回は、同年6月に毎日ホールで行なわれ、一応の成功のうちに終わりました。

第2回は翌年サンケイホールに於て行なわれましたが、この年は11月に行なわれた為、外大を除き、定期演奏会との関係で、スケジュールに於いて、また会計等において弊害があらわれてきました。

このように第1回、第2回との演奏会を開いたのでありますが、第3回を開こうとするに至って、表面的にはスケジュール等の為でありましたが、根本的には四大学の本質的な在り方に対する追求の欠如、そしてそれにより派生する諸問題により、中断せざるを得なくなりました。

その後39年の秋より、四大学の在り方を考えようと、幹事会を作り、初期の演奏会が何故中断せざるを得なかったかを検討しました。そして29年には5月、41年には9月に大学のグリーンメンが集り、ミーティングを行ない、同様の討議、併わせて今後の方針を話し合いました。また昨年春から隔週に幹事会を持ち、秋に一応の結論を得たのであります。

その結論としては、四大学の集る目的として「四大学は互いにその交流を深め、互いの合唱レベルの向上を図り、ひいては大阪府の合唱レベルの向上に寄与す」としています。

我々は一般の交歓演奏会に疑問を抱き、特に互いに近接校である利点を生かして、互の理解を深める機会を多く持ち、一緒にクラブとしての問題、技術的な問題を討議し、それと併せて、演奏会を持とうとしています。そして演奏会に於ては、従来の形式主義を排除し、演奏会そのものが、観客の皆様の御批判と共に、我々自身としても互いに批判できるようにと我々も客席をフルに活用させていただきます。このようにしてミーティングと演奏会を相補してゆくものにしたいと思っております。

目的として「大阪府……」の言葉が有りますが、日本の合唱界で高い水準を行く関西にありながら、低迷を続ける大阪大学合唱界に対する心意気を御理解頂ければ幸いに存じます。

どうか我々四大学の趣旨を御理解頂き、演奏に厳しい御批判を頂きたいと思えます。

四大学演奏会運営委員

阪大	樋口 博雄	森岡 道久	市大	桜井 日出雄	小野 順三
	広田 一仁	吉識 道明		崎丸 正伸	山田 雅典
	高木 善之			大内 一	
府大	高松 一郎	木村 龍介	外大	天野 邦彦	小竹 正幸
	桧原 利夫	平松 克司		南 雄次	佐藤 謙司
	小宮山 清光			奥野 薫	

(各校アイウエオ順)